

大妻女子大学人間生活文化研究所創立30周年記念事業

記念シンポジウム講演録

「激動するミャンマーはどこへ行くのか？」

2012年10月19日(金) 開演13:00～終了15:00

大妻女子大学
千代田キャンパス
[大学校舎A棟1階 150教室]

大妻女子大学人間生活文化研究所

※この講演録は、2013年1月30日に電子書籍として出版された『大妻女子大学人間生活文化研究所創立30周年記念事業 記念シンポジウム講演録「激動するミャンマーはどこへ行くのか？」』（大妻女子大学人間生活文化研究所）の内容全部を転載したものです。

Otsuma Women's University

はじめに

「激動するミャンマーはどこへ行くのか」これはアジアに生き、平和と繁栄を願う者誰もが国境を越え、民族を越えて共通に抱く希望と願望を含んだ問である。長い間ミャンマーはアジア、そしてアセアンの一員でありながら、この地域の急激な経済成長と情報化にもかかわらず超然として外交、政治、経済、文化など多方面にわたって敢えて独自の道を歩み、それ故に誤解されもしてきた。日本をはじめ世界のマスコミは沈黙を続けたミャンマーに関する情報の取り入れ口さえ持たず、それゆえに一面的なミャンマー情報とミャンマー観を無批判といえるほど素朴に受け入れてきた。現在でも殆どの日本人のミャンマー像はそうした断片的な知識と先入観によって形成されており、その信愛の感情とは裏腹に知り得ている内実はいちじるしく貧困である。そして今もミャンマーについてその実像を殆ど知らずして民主化と経済の解放を淡く、おぼろげに想像しているのである。

このシンポジウムはミャンマーの政治・社会に非常に詳しく、今もってこの分野の論客として名高い山口洋一元ミャンマー大使、若くして現地におけるフィールド調査を経験し、今はミャンマー文化研究の第一人者となっている田村克己国立民族学博物館教授、そして10年間現場でミャンマーにおける学校教育環境の改善事業を支援してきた大澤清二の3人で激動するミャンマーと、その課題について論じあうことになる。幸い、駐日ミャンマー大使のご好意によってシンポジウムのご後援もいただいた。この機会に、多くの日本のオピニオンリーダーの方々に共にミャンマーを考えて頂くよい機会となることを期待している。最後に、人間生活文化研究所をご支援いただいている賛助会員17社に心から感謝申し上げたい。(大澤清二記)

撮影 都築 治

シンポジスト

山口 洋一 (やまぐち よういち)

1937年生まれ。1960年 東京大学卒業後、外務省に入省。ユネスコ常駐代表(パリ)、駐マダガスカル、駐トルコ、駐ミャンマーの各特命全権大使などを歴任。1998年に外務省退官後、東芝顧問、慶応義塾大学非常勤講師(東洋史)などを経て、現在多数の非営利団体の役員を務める。

講演内容

I 民政移管に伴う情勢の急変

- (1) 政治体制の抜本的刷新
- (2) 規制の緩和・撤廃による自由化の進展
- (3) 少数民族との和解
- (4) 2014年にはASEAN議長国に就任
- (5) 軌道修正しつつある西側各国のミャンマー政策

III 生活に溶け込んだ仏教

IV 日本とミャンマー

- (1) 無類の親日国
- (2) 親日感情の由来

II 歴史の中に見出される「独立自尊の意気盛んな自由で平等の国」

- (1) 横溢する独立自尊の気概
- (2) 自由・平等・人権尊重の社会

田村 克己 (たむら かつみ)

東京大学大学院社会学研究科文化人類学専攻修士課程修了。鹿児島大学、金沢大学を経て、国立民族学博物館に勤務。東南アジア大陸部および中国南部を対象に研究調査を続け、ことにビルマ（現ミャンマー）では1977年以来、度々フィールドワークを行っている。

講演内容

ミャンマーは2006年に首都をそれまでのヤンゴンからネーピードーに移した。ネーピードーは都あるいは王都の一般名称であるが、その名で固有に呼ばれた都はもう一つある。ヤンゴンに先立つ、王朝時代最後の都マンダレーである。ネーピードーが新しくつくられているように、マンダレーも植民地化の危機という情勢にあって、仏教国の都として新たに建設された。

現政権は1990年代から国立博物館の整備や芸術文化大学の創設、歴代王朝の王宮の再建を進め、伝統文化を保存し、さらには、それを称揚する政策を推し進めている。それは王朝時代の栄光を復活させようとするかのようである。こうした文化政策や伝統のあり様を通して、現在のこの国の今とこれからのことを考えていきたい。

大澤 清二 (おおさわ せいじ)

1987年より大妻女子大学教授。現在は人間生活文化研究所長、大学院人間文化研究科長を兼務。2004年よりミャンマーにて学校保健・環境改善事業を行い、教育省と共同で年2回教育大学20校の教員を対象とした教育訓練セミナーを開催している。

講演内容

演者はミャンマーにおいて学校改善事業を行ってきた。この国の先生達の教育に対する思いは、アジアの他の国と比較してもその熱心さ、誠実さ、忍耐力の点で圧倒的である。先生達の奮闘努力のおかげで大妻女子大学の学校改善事業は5年間連続して文部科学省国際協カイニシアティブ事業において最高の評価を頂く事が出来た。学校建築、教員養成、情報、技術など多岐にわたる支援が必要だが、この国の教育が秘める力を信じるのはひとり演者だけではなかろう。シンポジウムでは、ミャンマーの生の学校の姿と改善事業の展開を紹介する。その中からこの国のポテンシャルを感じ取っていただきたい。数年後にはミャンマーが域内でも優れた人材の宝庫となることを信じて。



山口 洋一



田村 克己



大澤 清二

Otsuma Women's University

目次

開演の挨拶

- ▷ 大澤 清二 (大妻女子大学人間生活文化研究所 所長) 1

駐日ミャンマー連邦共和国大使キン・マウン・ティン閣下ご挨拶 2

記念シンポジウム

激変するミャンマー情勢の実相

- ▷ 山口 洋一 (元ミャンマー大使) 4

二つの都ネーピードー：伝統と文化の今

- ▷ 田村 克己 (国立民族学博物館 教授) 10

ミャンマーの学校・教育とゆくえ

- ▷ 大澤 清二 17

「激動するミャンマーはどこへ行くのか？」 29

開演の挨拶

(大澤所長)

みなさん、こんにちは。日本語で失礼いたします。それではシンポジウム「激動するミャンマーはどこへ行くのか？」を始めます。今日は3名のシンポジストに、それぞれの視点からミャンマーについてご発言いただきます。さらに時間があれば、これからのミャンマーに期待すること、期待する思いについてお話いただこうと考えています。

まずは、元ミャンマー大使で、我が国唯一のミャンマー通であらせられます山口洋一先生に「激変するミャンマー情勢」というタイトルで、その政治、社会状況を歴史的な視点をふまえながらお話をさせていただきます。ミャンマーに関する情報が極めて少ない中で、生の情報を質量ともに豊富にお持ちでいらっしゃいます。今日は、皆様が必ずしも知り得ていない観点からのお話もしていただけるものと期待しております。

2番バッターは大阪にごぞいます国立民族学博物館教授、また元副館長の田村克己先生にお願いいたします。学生時代からビルマあるいはミャンマーでたくさんのフィールド研究をなさってこられまして、現在もミャンマー、あるいはビルマにおける宗教や社会の研究の先頭に立っておられます。先生にはアカデミックな立場からミャンマーの実相を「二つの都ネーपीドー：伝統と文化の今」というテーマでお話いただきます。

3番バッターとして大澤が「ミャンマーにおける教育と学校の現状」、私たちが行ってきました教育協力の実際をかいつまんでお話申し上げます。それぞれ30分ずつ予定してございますので、シンポジストの先生方にはよろしく時間厳守でお願い申し上げます。そして、そのあとで再び、それぞれの演者にそれぞれのこれからのミャンマーに対する思いを少しずつ語っていただきたいと思います。だいたいこれで3時くらいになりますが、今日おいで下さったミャンマー大使は3時前にお帰りになられるそうです。また、本日せっかくおいでいただきましたミャンマー関係者の方たちとの情報交換会を別室で行います。時間がおありになる方は、隣の教室までお運びください。ここで1時間ほどのミャンマー情報に関する交換会を行いたいと思います。さらに5時からは、懇親会をささやかですが用意しております。ぜひご参加いただきまして、ご歓談いただきたいと思います。



Otsuma Women's University

駐日ミャンマー連邦共和国大使 キン・マウン・ティン閣下ご挨拶

(大澤所長)

それではシンポジウムの開始にあたりまして、このシンポジウムをご後援いただきました駐日ミャンマー大使、キン・マウン・ティン閣下、よろしくお願いいたします。

(キン・マウン・ティン閣下)

こんにちは。大妻女子大学の皆様、ご臨席の皆様、ご挨拶を申し上げます。私は駐日ミャンマー大使のキン・マウン・ティンです。大妻女子大学人間生活文化研究所創立30周年記念シンポジウムにてご挨拶の機会をいただき、ありがとうございます。貴大学は最初は大妻コタカ氏が塾として創立され、1942年に大妻女子専門学校として発展し、さらに1950年に短期大学、1967年から1990年までの間にも多くのキャンパスを創設し発展されています。素晴らしいと感じています。大変感心しております。

それでは少しミャンマーのことについてお話ししたいと思います。ミャンマーでは3500年前からエーヤワディー川流域に人々が生活を始めたといわれており、そのことを裏付ける土器等が発見されています。また、西暦7年にピューの王朝を設立した歴史的な資料が多く残されています。仏教遺跡で知られているバガンは、西暦847年12月23日に設立され、ミャンマーでよく知られている第一の王朝を樹立させたアノーヤター王が西暦1044年に即位しました。

1855年にミャンマーは植民地化されましたが、ミャンマー国民全体の努力により、1948年に独立しました。独立運動でとても有名な指導者は、アウンサンスーチーの父でありますアウンサン将軍であります。もしかするとご存知でない方がいらっしゃるかもしれませんのでお話いたしますが、ミャンマーの独立運動の際に日本はミャンマーに多くの支援をしてくださりました。この時代から日本とミャンマーの関係が深まっていったのです。

ミャンマー独立後、1962年までは社会主義経済、1988年から2010年までは市場経済を導入していましたが、軍事政権だったため、ミャンマーの経済は後退しました。しかし日本は、この間も経済と人道的支援を続けてくれました。2011年3月にティン・セイン大統領が率いる新政府によって、政治経済改革が行われて大きく前進し、これらの成功は日本をはじめ欧米諸国、国際社会からも高い評価を受けております。日本が対ミャンマー経済協力支援のために、さらなる準備を始めていることをミャンマー政府をはじめ、国民全体は歓迎しております。

かたいお話が続きましたが、ミャンマーは1300マイルの海岸を有しており、川や山など美しい自然に恵まれております。天然資源が豊富で、少数民族の文化伝統、仏教遺跡などが多く存在する素晴らしい国ですので、皆様にもぜひ一度観光に来ていただければと思います。



最後に皆様方には、ミャンマーの民主主義への支援、ミャンマーの国づくりや教育問題へのご協力をよろしくお願ひしたいと思います。日本とミャンマーとの友好関係が末永く続くようご支援、ご協力いただきますようお願いをし、私の挨拶を終わらせていただきます。ご清聴ありがとうございました。

(大澤所長)

ありがとうございました。



Otsuma Women's University

激変するミャンマー情勢の実相

元ミャンマー大使：山口 洋一

(大澤所長)

それでは、山口先生にご登壇いただきます。山口先生の御略歴等は配布いたしました冊子に載っておりますので、そちらをご覧ください。

(山口元大使)

ご紹介いただきました山口でございます。私のお話の骨子は、パンフレットの4頁目に項目だけが書いてありますが、これに沿ってお話を進めていきたいと思っております。ミャンマーは大きく様変わりしております。昨年の3月、長年の懸案であった民政移管を果たしました。テイン・セイン大統領のもとに議会制民主主義を採用して、あらたな国づくりのスタートを切ったということでございます。以来、世界の注目を集めてまいりまして、私も最近何度も足を運んでいます、非常に大きく変わっています。どのように変わっているか、政権の移譲に伴って急変している点をいくつか申し上げますと、第一になんといっても政治体制の抜本的刷新です。議会制民主主義が動き出しました。これはなんと50年ぶりのことなのです。ネ・ウインのクーデターが1962年ですから、それ以来複数の政党による議会は存在しておりませんでした。それがやっと50年ぶりに議会在機能が初めて国民意識に非常に大きな変化を及ぼしております。

一番大きな成果は、国家意識の高揚ということがいえると思っております。ミャンマーという国は、人口の69%を占める多数民族のビルマ族の他に、カレン、カチン、チン、モン、シャンなどたくさんの少数民族がいて、全部数えると135の民族から成る多民族国家です。この多民族国家をいかにひとつの国として東ねていくか、ミャンマーというひとつの国に属するのだという国家意識を植え付けて、統一国家としてやっていくかは大変難しい課題で、これが王朝以来、長年国づくりの鍵となっております。それが議会制民主主義が機能し始めますと、この問題への取り組みに好ましい効果を発揮するようになってまいりました。議会ではもちろんビルマ族の議員が多数を占めておりますが、その他、各少数民族の代表もおります。これまではそれぞれの民族が自分たちの問題だけに念頭し、自分たちとビルマ族との関係をどうするかということしか考えませんでした。この関係がうまくいかず武力闘争に及んでいるケースが多々ありました。このように自分たちの民族の問題だけに頭がいっていたところ、議会に来てみると、他の少数民族も様々な問題を抱えている、また、多数民族であるビルマ族もいろんな困難に直面しているということが分かって、要するに多数の民族間の相互理解が進み、お互い他の民族のことも分かるようになってき



たのです。それを通じて自分たちは他の少数民族も含めてミャンマーというひとつの国の国民なのだという意識が強まってきたのです。こうした国会のやりとりは、日々、新聞テレビで全国津々浦々、国民に伝わりますから、国民総じて、議会制民主主義が機能し始めたことによって、国家意識が高まり、ひとつのミャンマーに属するのだという観念が強くもたれるようになったという、非常に好ましい効果が見られるようになったのです。

それからもうひとつ、議会の活動を見ていて注目すべきことがあります。この議会は、議員の4分の1は軍から出すという制度になっておりますが、欧米はこれはけしからん、いつまでも軍が政治にぶら下がっているのは本当の民主主義ではないということでバッシングをしてきました。ところが、その軍から出ている議員の行動パターンを見ますと、軍の指示で統一行動をとっているわけではなく、それぞれの議員が自主的に判断して行動しているのです。ある案件について軍出身の議員が賛成票を投じるか、反対票を投じるかは、あの国も電子投票ではなくて、起立して賛否を問いますからすぐ分かりますが、各自バラバラなのです。決して軍の指図のもと統一行動をとるというのではなく、それぞれが自主的に判断しております。ですから、軍が4分の1議員を出すというのは、優秀な人材を送り込むというのが狙いなのです。ミャンマーでは優秀な若者は軍人になりますが、その軍人の一番優秀な人材を議会に送り込むというのが主眼であって、決して軍が指図して軍の意に従って国政を動かしていくということではないのです。その意味では欧米が4分の1を軍人が占めるのはけしからんという批判は必ずしも当たっていないと言えるのではないのでしょうか。

今年4月1日には補欠選挙がありました。ここではアウンサンスーチーさんのNLD（国民民主連盟）が、45議席のうち43議席を取るという結果になりまして、選挙の公平性、透明性を明らかにすることとなりました。これまた欧米が選挙といえば、操作をしてインチキな選挙をするのではないかと言っていたのですが、そういう批判は当たらないということを明らかにいたしました。

こうした新しい政治体制を欧米は、民政移管といってもまよかしの民政移管だと批判をしておりました。それと申しますのも、テイン・セイン大統領の新しい憲法に基づく体制は、申しあげましたように議員の4分の1は軍から出し、大臣の中で、3大臣、つまり国防大臣、内務大臣、国境大臣は軍が指名するという規定になっております。欧米に言わせれば、軍がいつまでも政権にしがみつこうとしており、これはまよかしの民政移管だと非難をするわけです。ミャンマーの人に言わせれば、「自分たちも最終的に目指す国家体制は完全な民主主義で、これは理想ですが、そこに至るプロセスはミャンマーの国情にあったやり方で、ミャンマー流に進めていくのであって、今日の明日、完全な民主主義をやれと言われてもかえって混乱が起きます」ということなのです。現にこの国は、独立後すぐにウー・ヌー政権では議会制民主主義体制を採用しましたが、当時国民は民主主義になじんでいなかったため、結局機能しなくて、ネ・ウインのクーデターになったわけです。やはり自分たちの国情にあったようなやり方でステップバイステップ、少し時間をかけて完全な民主主義に向かっていきますというのが彼らの考えで、現在のステップはその中間段階なのです。

この中間段階は、踊り場の民主主義といえるかと思いますが、ミャンマーの人はこれを“disciplined democracy”つまり「規律ある民主主義」と呼んでおります。最終的に民主主義を機能させるためには、いくつかの前提条件がきちんと整ってなければなりません。これは当然のことで、まず治安が維持され整っている、国民が飢え死にしないくらいの経済の営みが行われている、教育もある程度進んで国民の政治意識が



Otsuma Women's University

高まるなどの前提条件が整っていないと、ただやみくもに形だけ民主主義をやったところでうまくいきません。そこでそういう前提条件をきちんと整えるまでは、ある程度、軍が関与して「規律ある民主主義」をやって、その後、憲法改正をして、最終段階である完全な民主主義に到達すればいいでしょうというのが彼らの考えです。今の体制は、この“disciplined democracy”なのです。この点を国際社会はもう少し理解をしてあげなくてはなりません。

前提条件が満たされていないのに、どんな国も民主主義が一番いいのだというのは暴論で、西洋人の思い込みとしか言えません。想像してみてください。16世紀の日本で群雄割拠する戦国時代に織田信長が一生懸命天下人になって国をまとめようとしているところにアメリカ人がやってきて、「信長さん、戦なんかやらないで民主主義をやいなさいよ」と言っても全く意味をなしません。その時々々の為政者というのは、いかに自国に合った形で、どういう国づくりをすればベストかということに苦勞しているのです。これまでのミャンマー政府もミャンマーに合った形でミャンマー流の国づくりを進めていくということで努力し、今の段階は中間段階、踊り場の民主主義なのです。国際社会はこのような状況をもっと理解してあげる必要があると思います。以上が政治体制に関することです。

次に規制緩和、撤廃による自由化の推進という変化です。まず、言論の自由については、かつてはアウンサンスーチーさんの大きな写真付きの出版物などは全く見られなかったのが、このような新聞、雑誌もどんどん自由になって、今年の8月20日に検閲が全廃になりました。一切の検閲はしないということで言論の自由が100パーセント確立されました。それから労働組合もかつては禁止だったのが、これも結成できるようになって、ILOのヤンゴン代表がびっくりするほど非常に自由な組合の結成と組合活動が許されるようになりました。政治犯の釈放もどんどん進み、これまでの主だった政治犯はだいたい自由になりました。

経済面での自由化や規制緩和もどんどん進んで、貿易や投資面でもこれまでよりずっと自由になりました。特に外資の直接投資には優遇措置を伴った導入が図られるようになり、総じて経済面での規制の緩和、撤廃による自由化が大きく進展しました。

少数民族との和解も進みました。先ほど申し上げたように、多くの少数民族がこれまで武力闘争をしておりまして、1988年に軍事政権が成立した時点では、18の少数民族による武力闘争が展開されていました。18の内戦があったわけです。それがひとつひとつ和平の合意ができて、今はほとんどすべての闘争が終息しました。あとひとつふたつ話し合いが完全についていないのが残っておりますが、テイン・セイン大統領になってからさらに少数民族との和解の努力を進め、この問題もほとんど解決に近づいています。このような成果を受けて、2014年にはASEANの議長国に就任することも内定しております。

こうした好ましい変化を受けて、「まやかしの民政移管ではないか」と言っていた欧米も彼らのミャンマー政策を軌道修正しつつあります。ヒラリー・クリントン国務長官が昨年11月にこの国を訪問いたしましたし、EUの国もドイツやフランスは外務大臣などが訪問する等々、欧米の国もこの国に対する政策を大きくギアチェンジしています。日本はミャンマー政策の面ではむしろ欧米に先んじているといえます。玄葉外務大臣、枝野経産大臣が年末から年始にかけて相次いで訪問し、今年の4月には、テイン・セイン大統領が日本においでになって、日本は累積債権処理の問題を解決したり、ODAを再開する等、非常に積極的な政策を打ち出しています。殊にODAの面では、ヤンゴンの近くのティラワ港という港を中心に、経済特区を整備するという大型開発プロジェクトを日本のODAで推進するということになっております。日本は民政移管後、この国に対する非常に前向きな政策を推進しております。

こうした好ましい変化を、現地のミャンマーの人々はどのように受け止めているのでしょうか。こうした好ましい変化を一番喜んでいるのは、当のミャンマーの人たちです。ミャンマーの人たちにとってみれば、これで本来自分たちのあるべき姿の国の体制に戻れたという思いでいるのです。それはどういう事かという、歴史の中に見い出されるこの国の真の姿は、独立自尊の意気盛んな、自由で平等な国ということなので

す。私は今、「独立自尊の意気が盛んであるということ」、「自由で平等な国であること」と、2つのキーワードを申し上げました。これは11～14世紀のバガン王朝の時代からこの国の国柄は、独立自尊の気概が漲り、自由と平等が確保され、人権尊重にも手厚い社会であり、まさにこの2つのキーワードが当てはまる国だったので。ところが長年のイギリスの植民地政策で虐げられ、独立後も国づくりの困難な過程の中でいろいろな制約を受けてきました。それがテイン・セイン大統領の新体制になり、ようやく本来の自分たちの独立自尊の意気盛んな自由で平等、人権尊重にも手厚い国柄を取り戻せたということで、喜んでいのです。

まず、独立自尊という点について見てみましょう。そもそもチベットビルマ族が紀元前2世紀くらいにこの国にやってきた動機が、独立自尊の意気に燃えてということだったのです。チベット高原の南側斜面あたりにチベット王国がありましたが、いつも中国の脅威に脅かされ、中国に呑み込まれそうな状況にありました。そうした中で、独立自尊の意気盛んな人々が新天地を求めてミヤン



ンマーの地においてきたというのがそもそも国づくりの発端でした。それ以来、彼らはこの地にミヤンマーという国をつくり、その後の歴史では、ひっきりなしに周辺国から色々な侵略を受けますが、それをことごとくはねのけて独立を保ってきました。殊に歴代の中国の王朝はミヤンマーに侵略軍を繰り返し派遣してきましたが、常にそれを押し返しました。唯一の例外は蒙古襲来によるバガンの攻略で、これは1287年のことでした。日本は蒙古襲来の文永、弘安の役では、幸いにして神風が吹き鎌倉武士の働きよろしきを得て敵を押し返しました。バガン王朝の場合は、残念ながら1287年にバガンが攻略され、バガンの街は荒らされ、殺戮が行われ、ひどい目にあわされました。しかし、この時もフビライ軍はバガンは占領したもののここに居座って統治するということはずせず、駐屯軍すら置かずそそくさと退却してしまいました。それというのもバガンは落とされたけれど、その後、ビルマの人たちのゲリラ戦法による反撃が熾烈を極めたので、フビライ軍はいたたまれずに撤収してしまったのです。ここでも独立自尊心の面目躍如たるものがあります。

19世紀になりますとイギリスは、この国に食指を動かして植民地化に乗り出すのですが、3回にわたる熾烈な戦争を繰り返さねばなりません。最終的には1885年にミヤンマー全土を植民地化するのですが、その間非常に大きな犠牲を払わざるを得ませんでした。ビルマ族は独立自尊の意気が盛んであるが故に、イギリスの植民地化に対して、非常に強い抵抗を示し、ミヤンマーはイギリスが一番手を焼いた植民地でした。イギリスが地球全体でアジアやアフリカに持っている植民地の中でも一番過酷な植民統治を行ったのがミヤンマーであると言われていますが、それはビルマ族が独立自尊の意気が盛んで、なかなかおそれと植民統治に甘んずることなく、いろんな形で抵抗したということの現れです。

やがてこの国は1948年に独立しましたが、そのときも英連邦には入らず、完全独立を達成しました。旧イギリスの植民地は、おしなべて英連邦に入っているのですが、この国は英連邦には入らず完全独立をし、独立後はずっと中立政策をとってきました。もともと独立当初はどちらかというと西側よりの中立政策でしたが、やがて厳正中立政策に軌道修正し今日に至っております。厳正中立政策をとるにいたったきっかけは1949年の中国共産革命です。この時に国民党の蒋介石は台湾に移りますが、南の方にいた国民党軍はミヤンマーになだれ込んできて、ミヤンマーの中で再起を期して、蒋介石と通じながら反抗をするという構えでおりました。それをこともあろうに、当時は冷戦ですから、アメリカが空輸でもってミヤンマーになだれ込んできた国民党軍に武器や食料を援助しました。当時のウー・ヌー首相はアメリカに何回も「そんなことは止

Otsuma Women's University

めてください。迷惑なので、空輸の援助はやめて、なるべく国民党軍を引き取ってもらいたい」と要求するのですが、アメリカはなかなか受け入れない。それ以来、この国は西側よりではなく、完全に厳正中立の政策をとるようになったのです。

以上のように独立自尊の気概に満ちあふれているということが第一のキーワードですが、次に第二のキーワード、自由平等、人権尊重についても見てみましょう。自由平等はそもそも仏教の特質です。釈尊の教えは、当時あったカースト制度を前提としたバラモン教やジャイナ教などの宗教に対して、万民平等の教えとして釈尊が始めた教えですので、敬虔な仏教徒であるこの国は、自由で平等というのが基礎になっているのです。日本の場合、我々は仏教徒なのですが、神道や儒教や武士道というような、日本的ないし東アジア的理念や思想で土農工商という階級制度ができましたが、この国の場合は、全く自由で平等な社会になっています。

共同体の意思決定は原則的に全員参加の合議で決めるという慣わしで、村長さんは村民がみんなで選びます。国王ですら、王位継承の制度が体系化する初期の段階では、みなを選んでおりました。これはまさに民主主義です。こういった平等社会を支えているひとつの枠組みは、大地主ができにくい仕組みにあります。土地の相続は、日本には昔「田分け」という言葉があり、土地の細分化を避けて、長子相続を原則としてきました。しかしこの国は自然に恵まれていますから、土地の相続は男女を問わず子孫に平等に配分するという制度ができました。また、王様に仕える、王の従臣たちの任期は王様一代限りで、王様が亡くなるとそこでみんな辞めるという原則でした。もちろん次の王様が同じ人を起用するということはありますが、原則は一代限り王に仕えるということです。従って貴族階級が生まれる余地はありません。日本はかつて蘇我氏や藤原氏など、天皇に近い階級が存在しましたが、そういうのが存在しないということです。それから、整備された法制度の存在もこの国の特色です。古来ミャンマーでは非常に法制度が整備されておりまして、王様といえども法の前では平等の立場に置かれていました。後のコンバウン王朝の時代には、権勢を極めたボードーパヤー王自身、土地収用のことで訴えられて被告席に立つ事さえあったのです。

家族制度は個人主義を特徴とした制度ですので、家という観念はありません。家というのがなく、結婚は男女の自由な結びつきということです。家庭の中ではむしろお母さんのほうが発言権が強いという状況です。そういう状況ですから、バガン王朝の時代から男女平等で、女性の地位は非常に高く、王宮の高官もいましたし、女性の銀行家もいました。バゴタの寄進者の中にも女性の名前が出てきます。バガン王朝の時代といえば、ヨーロッパでは中世のまだまだ非常に遅れた時代で、十字軍をやっていた時代です。中世のヨーロッパと比較するとバガン王朝の時代のミャンマーという国がいかに進んだ国であるか、進んだ社会体制、国家体制であったかということが肯けると思います。

仏教の話と日本とミャンマーの関係はこの後、田村先生も詳しくお話なさるでしょうから、詳しくは申し上げませんが、我々日本人は仏教徒でございといっても、朝な夕なにお参りに行く人はあまりいず、仏教が生活に溶け込んでいるとは言い難いのですが、ミャンマーの人は約9割が仏教徒で、非常に信心深い仏教徒です。我々は誰も人生の意義は何か、何の為に生きているのかなどと、若い頃は思い悩みますが、ミャンマーの人はそんなことで悩むことは全然ありません。人生の目的は徳を積んで輪廻転生でよりよい生まれ変わりを期することにつきますのです。この世で生きている間、徳を積まないで悪い事を行っているとい



世は望めません。功德を積むということは仏の教えに従って、正しい行いをするということです。一番基本的な教えは、仏教の五戒といわれる、①殺すべからず ②盗むべからず ③嘘をつくべからず ④淫らな行為をするべからず ⑤酒を飲むべからず、ですが、それをきちんと守って、よりよい生まれ変わりを期するという、人生の目的はそれにつきます。

日本とミャンマーとの関係ですが、ミャンマーは非常に親日的な国です、その理由は、国民性が似ていることがありますし、イギリスに対して非常にひどい目に合いましたので、反英感情を強く持っていて、イギリス人は自分たちを虫けらみたいに扱ったけれど、日本人たちは同胞として温かく遇してくれるということで、日本に対する親近感が強まっているという側面もあります。

ご清聴ありがとうございました。

(大澤所長)

ありがとうございました。

Otsuma Women's University

二つの都ネーピードー： 伝統と文化の今

国立民族学博物館 教授：田村 克己

(大澤所長)

続きまして田村先生にお話しいただきます。

(田村教授)

田村でございます。本日はお招きいただきましてありがとうございます。私は、パワーポイントを使ってお話をさせていただきます。タイトルは「二つの都ネーピードー：伝統と文化の今」ということであります。最初、少し前置きのおしゃべりをさせていただきます。

私は専門が文化人類学で、文化というものを専門にしているわけです。ただ文化というのは、さまざまなコンテキストによって意味が変わってまいります。今年の夏にオリンピックがありました。日本の選手がわりとメダルをとって、だいたいそれが団体競技だった、というとなんとなく日本というのは昔からのお互いのチームワーク、団結の力はあるという、日本の伝統だなどという論調となります。しかしながら、それは必ずしも成績がよいということと本当に結びついているかどうかということとは分からない。万一日本の成績が悪かったときは、ほらやっぱり日本というのは、周りの目ばかり気にして個々人の力が出せないからなかなか成績が上がらないという論調になったかもしれない。ともかく、ある事象があったときによくあるのは、文化という言葉で語られる、あるいは伝統という言葉で語られる。しかしながら、それは決して実証化されたものではないということですね。私たちが病気になる、ちょっと調子が悪くなり医者に行くとよく言われるのが、まず「風邪じゃないですか」。そうするとだいたい皆さんは安心するし、なんとなく納得する。そのうち治ってくるということなんですけど、そういうふうには、文化というのはあくまでも、私たちがある事象に出会ったときに文化を語ったら、その事象というものが分かった気になる、納得する。これが強いていえるならば文化の効用です。

先ほど大澤先生が、私が学生時代からビルマに行っていたというお話をされましたが、それはもう少し歳を取ってから、就職してからです。今は私もいい加減歳を取っていますが、調子が悪くて医者に行ったときによく言われるのは「加齢です」。なんとなく寂しい気持ちになるけれど、「まあ、よかった重大な病気じゃなかった」と安心する。まあ、文化とはそんなもんです。しかしながら、もうちょっと文化を知っていると、何かいいことがあるかもしれない。加齢だからと放っておくのではなくて、なぜ歳を取ったら調子が悪くなるのか、もう少し知ると、なんとなく対策も立てやすくなる。そういうことがある、これが文化を知ることですね。

最近、ミャンマーのことがしばしば話題になっていて、いろんなネット上の記事もありますが、その中に現地に進出した企業の話題などがあります。マニーとかいう医療機器の専門メーカーが長い間ミャンマーに進出しているようで、そのインタビューの記事を読んだら、非常によく分かります。非常に現地で苦勞して、それを踏まえて様々な問題点を理解しているというのがよく分かるのです。その中にミャンマーの工場の皆さんに、定期的にお坊さんと呼んで講話を、説法をしてもらったら離職が少なくなったという話がありまし

た。実際そうなんです。ある程度文化が分かっていると、ちょっと対策が立てられる。

大澤先生が前に話されていたことですが、大澤先生は教育省のプロジェクトをやっている、その時にミャンマーのカテインという、お坊さんに贈り物をする重要な年中行事があるのですが、その時に寄進をされたら、するとそれから後、ミャンマーの人の態度が変わり、ぐっとお互いの関係がスムーズに行くようになった、こういうふうなことをおっしゃっていました。その通りです。ミャンマーの人たちがどれだけ仏教の儀礼、あるいは仏教を重要に思っているかを知る事、またそれを実際に実践していくというのは非常に重要なことですね。これを知っていると得することなのですね。ただ一言よけいなことを申し上げれば、寄進すればいいという問題ではない。一生懸命いっぱい寄進する人がいると、しばしば言われるのが、「あの人は陰で悪い事をしているに違いない、陰で悪いことをやっているからそれをカバーするために一生懸命寄進をするのだ」ということが時に言われます。徳を積むという事は、プラスになりますけれど、逆をいったら、悪い事をしたことを補っているという考え方があります。だから寄進したらミャンマーの人は分かってくれると思ったら間違いなんです。大澤先生のように普段から良い行いをしていて、ミャンマーの人からとっても良い人だと思われてはじめて、寄進してすごく尊敬される。有徳の人でないと、本当に寄進しても意味がない。なかなかそれが難しい所なんです。簡単にミャンマーに行って、新しい仕事を始めるときに、ミャンマーの人と仲良くなるために寄進する姿を見せようとか、寄進したらうまくいくと思ったら、それは間違いで、やはりきちんと付きあって、その上ではじめてそういった相手の文化というものを重んじていく事が大切なんです。

もうひとつ、文化というのはつくられるものです。決して固定的なものではない。これはどういうことであるかという、たとえば、先ほどの加齢の問題にこだわるけれど、我々も歳を取ってくるといろんなサプリメントを飲んだりしたり、ジムに行って体質改善したり、医者に行って手術するとか、そういうふうなことをするように、つくり変えていくことがあります。それは、たとえばその国における文化政策であったり、あるいは、よその影響であれば観光であるとか、これからミャンマーが受けるであろう様々な経済的な外的影響によって、文化というものがつくり変えられていきます。歴史的にいえば、植民地化の影響で文化が変化してきました。このように文化というものはつくられてきたもの、あるいは、今つくられているのだということ、私はそう考えています。

今日、お話しするのは、現在のミャンマーにおいてどのように文化というものがあり、ある面では、この国の歴史を踏まえて今のこの国がどのような文化をつくろうとしているのか、こういうお話であります。

前置きはこれくらいにしまして、まず、ネーपीドー、新しい首都のことです。2006年10月にヤンゴンから遷都していきました。ヤンゴンの北300kmくらいにあって、大澤先生は7回くらい行かれたそうですが、なかなか行く機会もないですし、行ってもまだ何も揃ってないですけど、いくつかのゾーンに分けられた人工都市です。この写真(スライド4)のパゴタはウパタサンティー・パゴタといって、前首都ヤンゴンのシェエダゴン・パゴタと形状が同じで、それより1フィート低いというものであります。この周りを見ていただいたら分かるように、がらんとしていて何もなし。こちらが宗教博物館ですが、この他にさまざまな省庁があります。

これはショッピングセンターの上階から見た写真(スライド5)で、駐車場のずっと向こうに公務員の宿舎であるとか、そういうものが建設されています。しかし、今のところまばらな状態です。

ネーピードーの広さをどう考えるかということ



スライド4 ネーピードーのウパタサンティー・パゴダ

Otsuma Women's University

いのですが、だいたい（東京）23区の3分の2くらいで中心部の面積だという感じですね。そこに省庁くらいしかないというのが現状です。しかしながら近代的なショッピングセンターなどが出来ています。ミャンマーも今、ミニスカートをはいている女性が出てきているのですが、とにかく近代的なショッピングセンターには、ミニスカートの女性を見かけることがあります（スライド6上）。

ここネーピードーは夜中もずっとネオンが途切れることなく、電力事情が悪いと言われるミャンマーにおいては、電気もインターネットの接続具合もとてもいい、はっきり言ってここでもし仕事をするとなると、いわゆるインフラはいいわけです。もっとも、ここ以外の土地はインフラがあまり良くないし、電力事情が悪いのが現状です。

ネーピードーという言葉自体は都、王の都という普通名詞です。しかしながら、実は以前にもネーピードーという名称の都があったのです。それはどこかというとマングレーで、1860年から植民地化される1886年まで王都でした。このマングレーの雅称はヤダナポウンネーピードー、ヤダナポウンというのは「宝石のような」という意味です。ミャンマーというのは宝石がたくさん採れるので有名な国ですが、その宝石のように輝くばかりの都だという意味で、この名前がついています。むしろ歴史的な文書ではマングレーよりもネーピードーということで、実はネーピードーというのは2回目なのです、今回。だから二つの都ネーピードーというタイトルで私はお話をしております。

ここは1860年にミンドン王により遷都されました。仏歴というのはお釈迦様が亡くなられて、入滅してから数える暦ですが、その暦で2400年に、西暦の1856年に、この土地に仏教の都ができるという予言をお釈迦様が生前にされたといわれています。その予言を成就するためにミンドン王が遷都しました。そのときそこに街があったのではなく、今のネーピードーと同じように、ほとんど何もないところでした。マングレーというのは、エーヤーワディー（イラワジ）川の左岸の東側に王宮を中心に広がっている街です（スライド8）。そこはもともと何もなかった、そこに新しく街をつくったのです。今のネーピードーが山を切り開いてつくられたのと同じように、つくられた計画的な都市です。一辺2kmの王城を中心とする計画都市であったのです。そのことは今のネーピードーも同じです。

これはマングレーの市街図です（スライド9）。オコーナーというイギリス人の戦前の旅行記の中にある



スライド5 ネーピードー

スライド6 (上)ネーピードーのショッピングセンター
(下)ネーピードーの夜のイルミネーションスライド8 (上)マングレー：王宮を望む
(下)マングレー：エーヤーワディー川を望む

地図をもとに私が作成したのですが、一辺2kmの王宮を中心に基盤の目ですと町づくりがされています。1858年に、この南のアマラプーラという前の王宮の様々なものを移しました。当時は車がありませんから、象とかいろんなものを使って運んでいったとのこと。現在のネービードーもヤンゴンの町から役所などが移転し、役所ではヤンゴン当時の古い備品を使っていますけれど、それとちょうど同じ事が行われていました。歴史は繰り返していると言っていいかもしれません。

戦前の英領時代のマンダレーの様子を見ると大きな建物など何もない。今でもマンダレーの街は、木が生い茂っているところですが、そういうふうな土地です。王宮も多くの建物が平面的に広がっており、そこに獅子の玉座で、全部で8つプラス1つ、合計9つありました。マンダレー王宮が第二次世界大戦で消失してしまうのですが、玉座のひとつだけがインドのカルカッタの博物館に行っており、それが今戻ってきてヤンゴンの博物館にあります。これは非常に立派なものです。これを見るだけでミャンマーに行く価値が十分にあります。

これは遷都を行ったミンドン王（スライド12）です。ミンドン王は何をしたかという、マンダレーをつくったのと仏典結集を行いました。仏教のテキスト、経典はいろいろな異伝がありますが、それらを整理、校訂して正しい経典をつくりました。そして、そのひとつの節の一頁を石に彫り込んで、それぞれを小さな仏塔形の建物におさめました。ミャンマーの人たちはこれが世界一大きな本だと言っています。余談になりますが、この時代やはり西欧の衝撃というのは大きい訳です。時代的背景としては、英国がどんどん周りを植民地化していきます。そのことによりビルマは圧力を受け、ミンドン王自身は西欧化にいろいろ務めるのですが、やはりひとつの大きな違いというのは、西洋のものは恒久的である、これに対してミャンマーの建物などは木や竹であって、恒久的ではない。書物もそうですね、ヤシの葉で出来たものに



ミンドン王（在位1853-1878）

スライド12 マンダレーをつくったミンドン王

スライド18 (上)ヤンゴン；下町の中心地にあるスレー；パゴダ
(下)ヤンゴン；スレーパゴダ前の広場

スライド9 マンダレー市街図



スライド19 (下)ヤンゴンの下町

Otsuma Women's University

刻んでいったのが経典ですが、そういうものをいわば不滅のものにおさめるというのは、ひとつの西洋に対するリアクションとして、非常に興味深く思います。ちなみにベトナムのフエにかつての王朝の歴代皇帝の墓があります。そこにカイディン帝の墓というのがあって、建物がヨーロッパ風で、材料も陶器やタイルなどでつくって、墓自体が永久に壊れないものにしてあります。ベトナムの方がもうちょっと後なのですが、いわゆる不滅のものをつくろうという意志がここにも見られるわけです。

それから、マンダレーでミンドン王がつくったのが、世界一大きなパゴダで、ミンゲンという、マンダレーのエーヤーワディー川対岸にあります。パゴダの入り口には、日本でいえば狛犬のような獅子の像がありますが、その像の台座のところをつくったときに地震があって、そこで終わってしまったので、この台座だけが残っています。今は観光名所の一つになっています。

それから次は、そのパゴダの世界一、この大きな鐘もつくりました。これも観光地化しています。

ところで、実際にはマンダレーは、今でも古都と言えますけれど、実際に都であったのは非常に限られた期間で、わずか25～26年、四半世紀くらいでした。そして、ミャンマーは英領となって都がヤンゴン（ラングーン）に移っていくわけです。ヤンゴンはイギリスの植民地になってから開けていって、いうなれば近代化、西洋化の入り口、中心であったわけです。その後、独立してからもヤンゴンは首都でした。それから1962年から後、前のネ・ウィン時代にビルマ式社会主義という外国からの干渉を排除した極めてナショナリズムの強い体制となっていきます。この体制が目指したものは、西欧とは違う意味の近代化です。

今のヤンゴンの街はそういった西欧の文化の香り、西洋文化の入り口であったことがよく分かります。そういう様々な風景があります（スライド18）。この下町などは昔のコロニアル風な建物です（スライド19）。こう



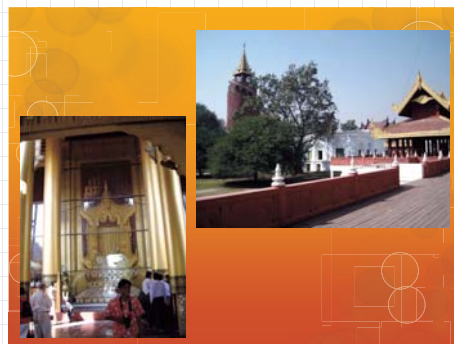
スライド21 ヤンゴンのシュエダゴン・パゴダ



スライド24 マンダレー王宮の復元工事（1990年）



スライド20 ヤンゴン



スライド25 (左)復元された「獅子の玉座」

いった教会があって、英語の看板があります（スライド20）。そして、これがシュエダゴン・パゴタです（スライド21）。

1988年以來のいわゆる軍事政権が進めてきたのは、私はミャンマー化だと思っています。それは、ネ・ウイン時代のいわゆるビルマ化とは違う、ミャンマー化というべき現象だと思います。ビルマとミャンマーとの言い方については、また別の機会に時間があれば言いますが、いろいろ問題はあるけれど、この軍事政権の間にやったことは開発独裁によるインフラの整備です。文化の面でもそれが非常に明らかになっています。1989年からマンダレー王宮の再建、バガン（バガン）遺跡などの文化財の修復、保存、国立芸術文化大学の開設、国立博物館の移転、新しい博物館の開館など、こういうことがどんどん行われていきます。

これはマンダレー王宮の再建の様子で、1990年のはじめの頃の現場です（スライド24）。これが今、こういう形で王宮が再建され、先ほどいった獅子の玉座も再現されています（スライド25）。

これが王宮の中、人々は中でいろいろ思い思いに過ごしています（スライド26）。ミャンマーの方にこれが出来てどうなのかと聞いたところ、やはり自分たちの歴史を見る事ができるということは非常にうれしいことだといえます。

これは芸術文化大学です（スライド27）。これはちょっと面白い写真なのですが、前の博物館は、英領時代フレイザー（パンソウタン）通りという下町にあったのですが、そこに行ったときのものです。ミャンマーは宝石がいっぱいあり、王様の持ち物の宝石がいっぱいあります。それらが博物館に収蔵されたおり、移転にあたってその宝石をひとつひとつ、こういう形で洗ったり調べたりしているところです（スライド28）。こういう宝石の立派な器、これも国立博物館にあります（スライド29）。こ



スライド27 (上・下) 国立芸術文化大学における伝統芸能の継承



スライド28 (左・右) 旧国立博物館での移転作業(1994年)



スライド26 (上・下) 復元されたマンダレー王宮



スライド29 ヤンゴン国立博物館；王朝時代の宝物

Otsuma Women's University

うした貴重なものは、このような鉄格子に嚴重に守られ、おさめられています（スライド30）。

申し上げたように、そういった文化政策はナショナリズムを可視化していき、国民を統合していきます。そして王朝時代の記憶を再び甦らせていきます。特にアノーヤターとバインナウンとアラウンバヤーという3人の王様がその中心です。国立博物館にもその像があるし（スライド32）、ネーピードーでは、軍事パレードをするところにはこの3人の王様の大きな像があります。

首都も変わっていますが、国旗も変わっています。国旗というのは、英領時代から同じスタイルで、軸側上の四角の中の国章変わるだけです。ネ・ウィン時代を通じてもずっとこれですが、新しい国旗は新たなデザインです。それは、国が別の形をとろうとしているのではないかと思います。

最後に時間になりましたので、問題だけ申し上げます。今ミャンマーは、国民国家をつくっていかうとしています。いわゆる王国というものは決して否定的にはとらえませんけれど、その王国というものが今、新たに復活しているとも考えられます。それはもちろん昔の王国そのものではないけれど、新たな伝統をつくりだそうとしていると言えます。いろいろ問題はあります。多民族国家の中で、ミャンマーの王国ひとつでいけるのかとかいう問題はあります。米国のクリントン国務長官がテインセイン大統領と会った時、獅子の玉座、そのレプリカの前で会談しています。その写真を見たときに改めて今のミャンマーは、新しい王国をつくろうと、新しい伝統をつくろうとしているのだと思いました。しかし、それはどういう形のものであるのかよく見えていません。

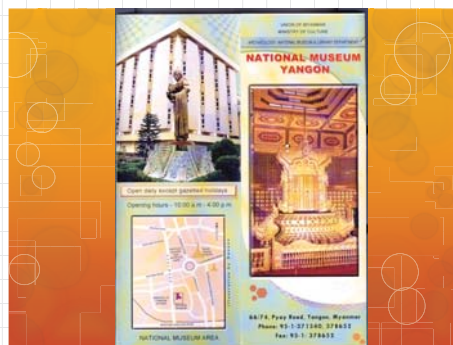
最後にこれだけ申し上げたいのですが、昔マンダレーがつくられたとき、ビルマの国力は大きくて、東南アジアで一番強い国でした。それがイギリスとぶつかって頭を押さえつけられてどうしようもなくなりました。その時代にマンダレーをつくったのは、決してむやみにそうしたというのではなくて、むしろそれだけの国力があったと私は見た方がいいんじゃないかと思います。現在ネーピードーがつくられているのも、マイナス面にとらえるだけでなく、資源などを含めて豊かな国力がある程度蓄積された状態にあるからともいえます。かつてマンダレーが都でなくなり、植民地化されてから、植民地支配の過程で国力が奪われていきました。これから先、民主化や様々な経済発展、これが起こります。そういうことによって実は一番危険なのは、ミャンマーの今の国力が奪われていくということだと思っています。それは、ミャンマーの方々が大切に持たれている国の力です。これはあくまでもミャンマーの文化のコンテキストの中でミャンマーの人々によって守られるべきものであって、そこから発展するべきものと考えております。少し時間をオーバーしたかもしれませんが、ご清聴ありがとうございました。

（大澤所長）

田村先生ありがとうございました。



スライド30 (左・右) ヤンゴン国立博物館；宝物の展示



スライド32 ヤンゴン国立博物館のパンフレット

ミャンマーの学校・教育とゆくえ

大妻女子大学人間生活文化研究所 所長：大澤 清二

(大澤所長)

続いて私がお話し申し上げます。

タイトルは「ミャンマーの教育、学校のこれから」ということですが、まずは現状とそこに内包される問題につきまして、私が感じている範囲でお話いたします。私達は2005年から学校保健に関する改善プロジェクトをやってまいりまして、それなりの成果を上げてまいりました。今日はその中からミャンマーの教育、学校というものがこれからどうあってほしいかという希望を申し上げたいと思います。

ではスライドをご覧ください。

これは、典型的なミャンマーの公立学校です。今お話にありました、マンダレーでございます。南国風の校舎で二階の廊下がテラスになっておりまして、心地よいです。先生の制服は全国一律に緑のロンジーと白いブラウスでございます。

次のスライドもマンダレーの高等学校です。

教会の会堂をそのまま利用しています。この学校は伺いますところ、5,800名ほど(生徒)の児童生徒が在籍しています。高等学校は中学、小学校、そしてその下の幼稚園を併設しております。この学校では、私どもは3



先生の制服は白のブラウスに緑のロンジー

マンダレーの公立学校校舎



マンダレーの高校、5000名以上の児童生徒、イギリス時代の建物を利用している

マンダレーの高等学校 教会堂をそのまま利用?

ミャンマーの学校 (1)

- ▶ 学校数 小 40,725校 + 僧院付属学校1,402校
- ▶ 中学部まで(小学校を併設している) 35,611校
- ▶ 高等部まで(小中学校を併設している) 2,221校
- ▶ 教授言語はビルマ語。
- ▶ 高校では数学と科学の授業は英語。
- ▶ 小学校は、1時限30～35分で、最低週40時間
- ▶ 中学・高校は、1時限45分で、最低週35時間

ミャンマーの学校 (2)

- ▶ 就学年齢 6歳
- ▶ 学制 5 4 2 制 + 公営の幼稚園(3歳～5歳対象)
- ▶ 大学は3～6年
- ▶ 就学率は小学校: 96.56% 中学校: 42.2%
高等学校: 就学率32.6% 大学進学率は高卒の40%近く
- ▶ すべて政府の統括下
- ▶ 裕福な層では、インターナショナルスクール等に行く傾向
- ▶ 父母は学校、教師に協力的、教師に対し尊敬の念を持つ

Otsuma Women's University

日間セミナーを行いました。少し文字が続きますが、ミャンマーの学校の統計でございます。日本ではこういう統計はいくらでもあるのですが、ミャンマーでこういう数字を探すのは結構大変でございます。

学校数は小学校が約4万、僧院学校が、これは教育省の所轄外ですが、1,400校。日本のNGOなどが支援しておりますのは、だいたい僧院学校かと思えます。また中学部まで持っている学校が約3,500、そして高等学校まで持っているのが約2,200ということです。教授言語はビルマ語です。ただし、高等学校では数学と化学の授業は英語で行っております。国名ですが、ここでは、ビルマは民族名称と言語について使わせていただきます。

学制は542制で、就学率はかなり高く、小学校は97%です。近い将来、中学までが義務教育になるのではないかと聞いております。現在は小学校までです。大学進学率は何ところでは、高卒の40%ということでございます。国民全体の識字率は95%というのが公称でございます。したがって文字の読めない方はほとんどいないということございまして、これは開発途上国の中では際立って就学率、識字率が高いということになります。近年は裕福な家庭ではインターナショナルスクールなどに通う場合も増えていると聞いております。

親御さんたちは大変先生や学校に協力的で、私どものプロジェクトにつきましても大変協力的でございました。

さて、大学でございますが、ミャンマーの大学は現在188校で、内訳は以下の通りであります。

大学生は同年齢の人口の、私が計算いたしますと、だいたい12%ということになりましょうか。かなり分厚いインテリ層が形成されているということになります。またご覧のように理工系が大変多くございます。しかし残念ながら企業が極めて少ない。従いまして就職が極めて難しく、ここがなんといっても泣き所でございます。今後日本の企業の進出が切に待たれるところでございます。大卒以上がざっと計算いたしますと150万人くらいになっているかと思います。

それからヤンゴンの街にはこのような古本屋があちこちにあるようでございまして、国民の知的水準は高いと申し上げてよろしいのではないかと思います。

文字が続きますが、入学試験について申し上げます。進学熱は非常に高いように感じます。従いまして、塾通いが大変盛んでありまして、これは農村においてもそう

ミャンマーの大学 168校

- ▶ 教員養成大学 20
- ▶ 総合大学 64
- ▶ 科学技術省所管の工科大 61
- ▶ 運輸省所管の大学 1
- ▶ その他の省の所管大学 22大学
- ▶ 就学年限 3~6年間(理、文は3年、法、教育は4年、航空工学部等は5年、医学・歯学部等は6年)
+各種職業学校がある
- ▶ 大卒後の就職率 低い
- ▶ 大卒以上が、1988年から2009年までに計約147万人



ヤンゴン市内の古本屋

ミャンマーの「入試」(1)

- ・進学教育熱は高い 受験教育と塾通い
ブランド校に人気
- ・⇒主要教科の重視⇒保健体育、美術、音楽、家庭科 なし
- ・11年生で「全国共通試験」
⇒一律な学力評価⇒効率的な入試
- ・成績順による選抜
⇒画一的評価で個人の能力・適性の多様性が無視されやすい
- 例：医学部卒業生が医師にならないケースが多い
- ▶ テストの機械集計が必要になる⇒日本の支援

ミャンマーの「入試」(2)

- ▶ 女子の進学率が男子よりかなり高い
- ▶ 都市部は理系の割合が高く3対7
- ▶ 《理系コース》
 - 必修科目…ビルマ語、英語、数学、物理、化学
 - 選択科目…生物、経済、歴史から1科目
- ▶ 《文系コース》
 - 必修科目…ビルマ語、英語、数学、歴史
 - 選択科目…地理・経済・選択ビルマ語から2科目

でございます。都会では一部のブランド校に人気が集中しております。主要教科が重要視されています反面、実学といましようか、保健体育、美術、音楽、家庭科というものはないということでございます。11年生で高等学校を卒業いたしますが、卒業試験と大学入試を合体いたしました全国共通試験というものが行われまして、これは国をあげての一大イベントということになります。私どもがセミナーなどをやろうといたしましても、この試験期間だけは避けてくれと言われます。テストは1回で終わりますので、日本の大学入試と比べますと、大変効率がよるしいのですが、成績順に合否を決め、学部を決めますので、当然不合格者のドロップアウトが起きまして、これは今後の課題かと思えます。

また、テストという次元尺度で切っていきますので、場合によっては個人の能力の多様性というようなものが無視されてしまうということがあります。医学部を出られた方がお医者さんにならない場合が大変多いように私は感じます。あちこちで名刺を交換いたしますと、MDと書かれた方がいっぱいいらっしゃって、その方が本を売っていたり、工場をやっていたりしております。いろいろ理由はあると思いますが、慢性的な医師不足というのは入試制度とも深く関係しているように外国人である私には思えます。大学と産業界との人材育成に関するマッチングというものが必要なのではないかと、ときどき感じるわけでございます。

また、テストの採点というのも大変な労力です、そのために教育省ではいろんな工夫をしておりますが、近い将来には機械化せざるを得ないのではないかと、そのときには日本の協力が必要になるのではないかと考えます。

都市部では理系への進学が盛んでして、文系との比はだいたい7対3になっています。男子と女子を比較しますと、女子のほうが歴然として進学率が高い。つまり女性の社会進出、進学率が歴然としております。また理系のコースでは、受験科目としては物理、化学、生物がよく選択されます。文系では歴史と地理がとられるようです。ただ日本と違ひまして、理系も文系も数学が必修になっています。

次でございますが、入試に関連して、少し知育偏重ではないかと、実学が軽視されているように感じます。従って家政学部はないわけでございます。

それから、ミャンマーの学生や先生方は問題解決型の思考、行動があまり得意ではないのかなと感じるときがしばしばございます。科学教育を、これからぜひやっていただきたいと思えます。産業界が成熟していきましたときに、果たして対応できるかどうか、もちろん現政府も十分に承知してございまして、全国各地に理工系の大学をつくっていくということでございます。期待しております。

また、保健体育、音楽、美術、家庭科がございませぬので、当然それに対応する体育館や運動場、実験室のようなものがないわけですので、これから日本のいろんな援助を、学校建設の援助の中にも入れてゆくべき、と思えます。

そういう問題を含めて、カリキュラムをどうするかということ、日本政府はODAでやろうとしていますが、そういうことにも関係してきます。実学が少し弱いということを反省いたしまして、前世紀の末からユニセフが提唱しますライフスキル教育というものをございませぬ、これもどうも暗記科目化しているということがしばしば指摘されています。また、この暗記中心に対して、児童中心の教育をやろうと今、盛んに日本政府は努力しているようです。いずれにいたしましても、ミャンマーに合った、ミャンマーの子供たちに合った新しい教育のモデルというものが開発されなければいけないと思えます。僭越ですが、私たちの学校保健のプロジェクトがある程度成功したのは、こうした問題解決型のプログラムを提供したことと実は無関係ではないように思っています。

次のスライドは、私たちの活動のヤンゴンの拠点、教育省の教育計画訓練局のヤンゴンオフィスでございます。

これは新しい国旗でございます。私も緑のロンジーとタイポという正式の上着を着て、これから研修会を始めるところでございます。

Otsuma Women's University

つづいて、私が現在使用させていただいている、本省内のオフィスでございます。

今年からジャイカのオフィスが2階に出来ています。真ん中に座っていらっしゃる方が副局長の方でございます。

私たちのプロジェクトは外交政策委員会、FAPCといいますが、ここで2006年に許可を受けまして、教育省計画訓練局とコラボレーションをしてみました。学校保健の改善事業を83校で展開し、現在では20の教員養成大学の先生たちと仕事をしております。近年では年に2回、1週間から10日間の研修会をしています。内容的には日本の品質管理QCを取り入れました、ヘルスクォリティーコントロール、HQCと略しておりますが、これで学校保健や学校環境改善の技術をトランスファーするというところでございます。

学校保健の改善マニュアルをビルマ語で作って、2万部以上発行してまいりました。教育系の学生は全国で8,000名おりますが、先生と8,000人の学生全員が私どものマニュアルをお持ちでございます。また20の教育大学は地域の学校をフィールドにして実際の活動をやっていただいております、その成果をレポートにして公表していただいております。

これは私どものセミナー風景でして、1週間から10日間特訓いたしますが、女性の先生が断然多いのはご覧の通りでございます。非常に集中力がございまして、忍耐強いです。これは他の国のこうした経験と比較しても、圧倒的であると申し上げる次第です。

次のスライドは熱心に測定の打ち合わせをしているところです。ビルマ語のマニュアルが手前でございます。

こうしてトレーニングを受けた先生たちはそれぞれ自分の大学で講習会を行います。これはフレグーの教育大学でしょうか、大変感心したのは、学生たちはこのときはどなたもマニュアルを持っていないわけですが、それにもかかわらず300名の学生が物音ひとつたてず、じっと先生の話を聞いている、そしてメモを取り続ける。これは私たちしてみれば感動的というか、すごいと感じさせるほどの集中力でありまして、これは必ずミャンマーの将来につながると思います。

私どもがやっております健康の品質管理であるHQCによる学校の改善では、まず自分たちで学校内の問題を見つけていただく。不快、不都合、不潔、危険、そうい



教育省計画訓練局(ヤンゴン)のビル。

教育省教育計画訓練局ヤンゴン事務所



新生ミャンマーの国旗とロンジー姿の大澤、ヤンゴンのトレーニングセミナーで

新しい国旗と演者



大妻女子大学チームが使用しているオフィスで今年から始まる狩猟民の調査・打ち合わせ。副局長、現地の教育長と大澤。

教育省のオフィスにて



セミナー風景、7日から10日間の特訓、女性の大学教員が多い

研修会風景 大半が女性

うものを科学的な測定、検査を通じてデータ化し、統計化し、自分たちでその問題をどのように解決するかということを考える。私たちはそのお手伝いをする。そしてPDCAサイクルをまわして、次々と問題を改善していただくわけです。最初は最も単純ですぐにでも取り組み、すぐにも改善できる問題をやっていただいて、よしやれるぞという自信をもっていただく。それからだんだんと難しさを増していく、そういうことでございます。

次のスライドは、ビルマ語のマニュアルの表紙でございます。上のほうにHQCとございまして、その下にABCDEFとございます。まず研修会では、問題発見と解決の技術HQCを学びます。次にAのプログラムで、改善を効率的に進めるための組織づくりを研修します。次いでBのプログラムで活動の拠点づくりの保健室づくり、さらにそれをどう運営していったらいいのか、保健室は何をすべきところなのかを学んでいただきます。Cのプログラムでは、児童生徒の生活習慣の改善技術を学びます。実は、これがもっとも応用範囲の広い肝心なプログラムです。生活習慣というのは、単に生活習慣病だけではなく、他のあらゆる健康問題、安全問題の基礎だと私は考えています。例えば車を運転しているときに毎回、信号を無視し続ければ、そのうち必ず大変な事態に至る、これも習慣のひとつの結果でございます。

Dでは、学校環境の改善技術を学んでいただきます。Eでは、学校安全の確保の技術を学んでいただきます。Fでは、学校内での植物の育成と関連する栄養の管理を入れておりますが、本日は時間の関係でこれについては割愛いたします。

まず、Aのチームづくりですが、改善活動は、チームで行うことがまず基本でございます。校長先生が責任者になりグループで話し合いをしていただきます。サッカーと同じように、学校の改善は絶対に1人ではできないのでございます。

児童生徒、保護者を含めまして学校改善チームをつくります。さらにはコミュニティーの方にも入っていただいて、いわゆるコミュニティーインボルブメントも考えます。ミーティングを行いながら、校長のリーダーシップを進めていただく。学校毎に3~4人の担当教員を選抜しておきますが、実際に活動するときには全校を挙げて行っていただきます。

Bのプログラムでは、保健室を整備していただきます。



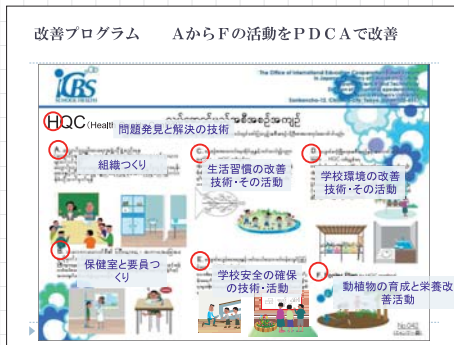
熱心に測定の打ち合わせ、ミャンマー語のマニュアルは2万部以上作成し配布

マニュアル片手に実習



トレーニングを受けた先生たちは自分の大学で伝達講習会を行う。レダ教育大学にて

教育大学の講習会風景



HQC活動はチームで改善に取り組みます。まずはミーティングでわいわいがやがや

グループにて話し合いをする先生たち

Otsuma Women's University

実際にはない学校が多く、あるいはあっても使えないということが多いため、まず場所づくりをするということです。私どもがミニマムの検査道具を支援いたしまして、いつでも先生が交代しているような、そういうオフィスにさせていただきます。ない学校では、校長室の半分を保健室にさせていただいた、ということもございます。ここが、学校を改善する基地だということもでございます。

これはマンダレー郊外のシンヤージーという村の小学校でして、竹で大変風通しのよい保健室をつくりました。

次は先生が保健室の活動のひとつを紹介しているところです。視力検査をしていただいています、日本では行っていませんが、30センチの距離で近場を見る、近見視力検査でございます。ヤンキン教育大学の300人の学生にデモをして教えているところです。保健室にはいろんな器材を置きますが、例えば、身長、体重、皮下脂肪なども計ります。

この図の中の左の図は発育評価チャートです。日本では母子手帳に必ず収録してあるものですが、ミャンマーにはございませんでした。発育、あるいは体格の標準値がないのに、栄養不良だとか、体が小さいだとか、そういうことをいうのではなくて、科学的なデータに基づいて栄養補給をするということです。そこで現地の先生方に協力をいただきまして、2万人の子供のデータをとっていただきまして、私どもでグラフにし、そして4万2千校の学校に配布してございます。これは教育雑誌にも使い方を掲載し、全国で使っていただいております。こういうのも保健室活動でございます。

次がCの生活習慣の改善でございますけれど、毎日自分の生活をチェックしていただきまして、それだけで生活が変わっていくということを体験していただきます。

例えば毎日体重を計るだけでも、管理に役に立つわけです。また年齢に応じ、個人の問題に応じて、1日のいろんな行動をチェックします。こうして信じられないかもしれませんが、頭じらみ、脊柱側弯、けがをしやすい、運動嫌い、それからこれから御紹介するODなどなど、たくさんの項目を改善していくことができます。これは、決してお金が沢山かかるプログラムではございません。

これは、脊柱側弯が改善した事例です。私どものプロジェクトの報告会で、現地の先生方に報告していただいたものです。左から右に変わったということもでございます。これは座り方、椅子などを変えただけでございます。こ



保健室の設置、マンダレー郊外の小学校にて



教育大学でのデモ風景



ミャンマー初の発育評価チャート



HQCで脊柱異常も改善

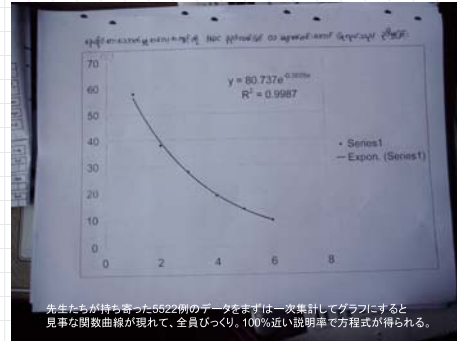
ういう問題は、日本でも明治時代にしょっちゅう起こったわけですね。

次にその応用例で現在進めています起立性調節障害ODと略していますが、その改善でございます。これは午前中の不調、朝起きられない、食欲がない、顔色が悪い、乗り物酔いなど、これらの症状を併せ持っている子供をODといいます。診断は、日本の小児自律神経研究会がつくった判定基準によっております。日本では、中学生ですとだいたい20%くらいがODですが、ミャンマーで試しにやってみたら、なんと60%がODございまして、これは大変だということで、ミャンマー政府の高官たちが、ぜひ全国でやってみようということでやってみました。

次のスライドですが、1週目では子供の内の60%がODと診断されました。そこで毎日、朝何時に起きたか、何時に寝たか、ご飯を食べたか、運動をしたかをチェックするだけでございます。すると6週間後には10%以下になったのです。これはつくったデータであるかのように、非常にきれいな曲線になっておりまして、相関係数はほぼ1でございます。上のほうに方程式が書いてございますが、この方程式に放り込みますと、何週たったらどれくらい改善するかということが、5,522名のデータで証明できたということでございます。この夏のセミナーで先生方が持ち寄ったデータを皆さんが見ている前で解析して、このようになったわけでございます。私は、ミャンマーの先生たちがいかにまじめにこういうプログラムに取り組み、またその先生のおっしゃることを子供たちがきちんとやったという、むしろそっちのほうにも感心いたしました。

生活習慣の改善はこれくらいにして、次は学校環境の問題です。ミャンマーの場合はトイレが汚いとか、教室が暗いとか、暑すぎるとか、机や椅子が合わないとか、様々な問題があるわけでございます。

このスライドは、今年の9月に行いました研修会で、先生方40人に先生方の学校で何が一番問題なのかを聞いたものです。例えば「トイレはなぜ汚いのか」、これをブレインストームしていただきますと、「汚いからよけいに汚す」、「掃除が行き届かないので臭い」、「窓がなくて暗い」、「水が出ないから掃除ができない」、「掃除道具がない」、「トイレが少ない」、「水道が故障している」、「雨季には校舎からトイレに行かれない」などなどが指摘さ



HQCでODが劇的に改善

D 「学校環境の問題」

- ・トイレ⇒ 汚い・使いたくない
- ・教室⇒ 暑熱対策(蒸し暑い)、照度管理(暗い、まぶしい)、視環境(見えにくい、目が疲れる)
- ・机、椅子⇒ (疲れる、脊柱の異常、姿勢が悪い)
- ・黒板⇒ (見えにくい、目が疲れる)
- ・廊下、階段⇒ (危ない)
- ・保健室⇒ (ない、使えない)
- ・騒音⇒ (うるさい)
- ・学校建築の施工管理⇒ (不具合、故障が多い)
- ・排水⇒ 雨季に学校が水浸し
- ・ごみ処理が出来ていない 不潔

教員養成大学20校の先生40人が指摘する問題点

- ▶ (今年の8月の研修会で)
- ▶ 1位 トイレの不潔、不具合、25票
- ▶ 2位 ごみ処理、20票
- ▶ 3位 教室の明るさ、16票
- ▶ 4位 学校建築 校地の不適、老朽化、破損、危険箇所、13票
- ▶ 5位 安全な飲料水の確保、11票
- ▶ 6位 教員宿舎の不足、狭い、老朽化、10票
- ▶ 7位 排水 8票
- ▶ 40人の先生の複数記入方式

特にトイレの改善はどの学校でも問題 ブレインストーミングしてみると

- ▶ トイレが汚いから余計に汚す
- ▶ ハエなどがおおい
- ▶ 掃除が行き届かないので臭い
- ▶ 窓がなくて、暗い、汚しやすい
- ▶ 水が出ないので掃除できない
- ▶ 掃除道具が無い
- ▶ トイレが少ない 水道が故障している
- ▶ 雨季には校舎からトイレに行けない
- ▶ ⇒ 改善は掃除当番制、掃除の定時チェック
- ▶ 対応は難しい問題 必ず改善できる

Otsuma Women's University

れました。それをひとつひとつ改善していくようにみんなで努力していきます。例えば「掃除当番制をつくる」、「掃除の定時チェックを行う」など、決して難しくなく、すぐに対応ができるアクションで問題を改善していくことができるのでございます。

次は、現地の先生方が報告して下さった改善活動をしているスライドをそのままお借りしております。

次はモン州のティンバオウーという学校の改善例ですが、「水が校庭にあふれてトイレに行けない」というのを、「バナナ畑をつくり」、「真ん中に通路をつくり」、「ヤシの木を切り倒して縁をつくり」、「その土盛をして改善をする」。そしてさらに「バナナを食べる」という、こういう報告でございました。お金はほとんどかかっていません。村人と先生たちが協力して、トイレ及び排水の問題、そして栄養補給の3つを同時に改善したということです。

次は「学校飲料水の問題」で、特別な検査や技術がなくてもできる工夫をしております。例えば臭い、濁り、色などを五感で検査し、しかるのちに大腸菌の検査を私たちが持っていった試験紙で行い、さらに問題があったら細かな検査をすると、その結果は、日本のように「検査結果がプラスでした。後は専門家にお任せします。」こういうわけにはいきません。ミャンマーでは、ひとつひとつ自分たちで改善していかなければいけません。そうして改善したモジュールをもって隣の学校に広めていく。そういう戦略をとって行くわけでございます。

「ゴミの分別」はすぐに行える活動です。お金に換えて教材を買い、あっという間に学校中が片付き、きれいになっていくわけですし、これなどはすぐにもできる活動です。



ごみの分別



トイレの清潔プログラム



HQC活動で排水問題を改善し、バナナの植栽



飲料水の検査



すし詰め教室風景

「蒸し暑い教室にぎっしり」で、なかなか体に合った机、椅子を用意するのは大変でございます。次は階段風の教室風景なのですが、これも机や椅子が子供の体に合っていないのです。「教室内の温度、湿度、風通し」、こういう問題はほとんど気配りされておられません。これからなんとかしていかねばいけない問題でございます。

次は「排水の問題」で、校地が低いために水浸しになってしまう、これは非常によく見られます。次は学校を挙げて、みんなで通路づくりをした例です。壁新聞に載っているものでございます。このようにきれいになりました



机と椅子の問題は姿勢に影響する

体格と机、椅子の不適合



階段状の机。

体格と机、椅子の不適合



教室不足。蒸し風呂。温度、湿度、通風の管理が...

過密な教室



校地の選定は重要。道路より低い校地には水が入り込み、雨季には校庭は使えない

雨季の排水問題



PTAの父母も参加して通路を確保する

全校挙げて排水対策



これで雨季にも教室に行ける

解決した排水問題



乾季の様子、元々50cm高いところに教室をつくるべきだった。

排水を考えた校地校舎の設計が大事

Otsuma Women's University

た。乾季の様子から50センチ地面が高いところに校舎を建てるべきだったということがわかります。

この写真は「教室が暗い」ですね。100ルクス以下です。これでは目の悪い子にとっては大変です。この場合は、窓際の本を伐採するだけで明るくなるでしょう。壁を白く塗る、平屋であれば天井にアクリル板をとりつける。たったそれだけでも改善できる。もっといろいろ改善の方法があるでしょう。そういう改善のモジュールを全土に紹介して、先生方にやっていただきたいのです。

次は「黒板の問題」ですね。この塗料は1缶700円です。校長先生が買ってきました。そして3時間後にはこんなにきれいになりました。

こういうことの積み重ねが、学校を快適にしていくわけでございます。問題意識の持ち方、問題の解き方、そして熱意、そういうものに対して私どもが、明治以来、日本で蓄積してきた知識の中から、どの技術が使えるか、どのモジュールが使えるかを考えてトランスファーしていくのです。

これは教室の風景でございます。

ここでは一棟に3教室が入っています。「ものすごい騒音」です。騒音計をもって行って計ったところ最高90デシベルでした。90デシベルというのは、ほとんど隣の人の声が聞こえません。地下鉄の騒音並みでございます。これは仕切りをつけなくてはいけません。

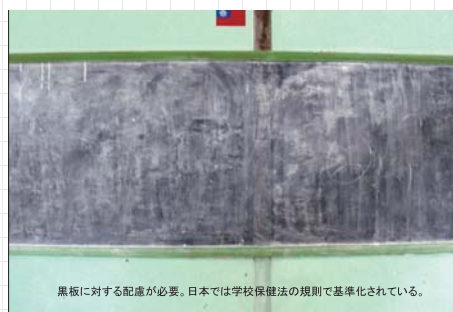
いずこの国でも「子供の最大の死因は事故」でございます。ミャンマーでも統計はないけれど、そうであるに違いないと推測しております。これはどこでケガをしたのかを調べまして、学校内の危険地図をつくります。それを校内に張り出しまして、ここが危険ということをまず意識してもらう。次に校長先生をはじめとして、



塗り替えられた黒板



照度不足の教室



黒板の管理も必要



黒板を再生させるペンキ



ワンルームに3クラス

ではどうしようかと対策を立て、ひとつひとつ改善していきます。

これはティンガンジョン教育大の小学校の事例です。床の段差を低くして安全になりました。校長先生が直したそうです。

これは「放置された切り株」を取り除きました。下のほうの写真は「排水が悪い」のでレンガを敷いていたのですが、よけい危ないので「レンガを取り除き」、新たに土を入れ直した、こういうことでございます。

総括いたしますと、教育の質を下支えする学校環境の整備が急務だということです。ここで、日本で蓄積してきた検査技術や経験が大変活きます。また、学校環境に関する法律、あるいは施行規則が必要です。学校を建てる場合には十分な配慮をして、人間工学的な合理性をもった学校を建てなければなりません。ただ学校を建てればよいということではございません。また、高温多湿の気候にあった校舎や教室設計が絶対に必要であって、そのために基礎データをまず取っていくべきです。私たちがお手伝いはいたしますが、ミャンマーの大学の先生

E 学校安全で怪我のない学校に



学校内危険地図を作成

危険箇所の改善写真



自分たちで危険箇所を改善する



自分たちで危険箇所を改善する



自分たちで危険箇所を改善する

HQC活動をしてみて、これから・・・

- ・ 教育の質を下支えする学校環境の整備・維持・改善
- ・ 日本の様々な検査技術が役立つ（日本の経験が活きる）
- ・ 学校環境に関する法律と施行規則が必要
- ・ 校地の選定、校舎の位置、校舎の設計、付属施設、設備などの人間工学を用いた最適化が必要
- ・ 高温多湿気候にあった校舎、教室設計が必要⇒基礎データの収集と分析
- ・ ミャンマーの大学人が研究することが必要。そのために人材を育てる教育が必要。

日本との関係

- ▶ 高い日本語人気 日本語検定⇔日本留学⇔日本での就労→日系企業
- ▶ 日本留学に対する日本の大学の受け入れ態勢の問題——近年では修学年限の緩和へ
- ▶ ⇔日本の大学側の日本語教育体制の改善

Otsuna Women's University

たちが自分たちで研究して、よりよい子供たちのための環境をつくっていただく、これが切なる願いであります。

ミャンマーと日本との関係は大変よいのでございますが、我々ももっとミャンマーの学生を引き受けられるようにしたいと願っております。ミャンマーにとっても学校教育が国を拓く礎であります。最後の写真は先ほどのマンダレー郊外のアマラプラーの写真でございます。ご清聴ありがとうございました。



アマラプラーのタウンタンマ湖

「激動するミャンマーはどこへ行くのか？」

(大澤所長)

では最後に、先生方から一言ずつ、「激動するミャンマーはどこへ行くのか？」ということで、ご発言していただけるとありがたいのですが。

(山口元大使)

日本としては、ぜひ積極的にこの国を支援していく必要があると思います。どういう姿勢で日本が今後この国と関わりを持つかということですが、ミャンマーの特徴として独立自尊の国柄ということを示し上げましたが、日本もぜひ日本独自の立場から、この国との深い関わりをさらに強めていくような積極的なアプローチをしていかなければなりません。戦後の日本の外交、対外関係を見ると、残念ながら対米追従に堕してきました。これまで軍事政権下におけるミャンマーに対する政策は、欧米のように制裁こそしていませんが、ODAは凍結の状態をずっと続けるということで、欧米の顔色を伺いながらの政策でした。日本独自の判断というよりは、アメリカの顔色を伺い、もっと平たくいえばアメリカに指図されての外交という面が非常に強かったのです。もちろん欧米との関係は非常に大切です。欧米と調整しないで勝手にやればよいということにはなりません、さりとてアメリカの顔色を伺いながら外交を進めるべきではなく、日本のほうがきちんとした判断をしていけば、欧米の非を正して、こうあるべきだと日本の立場を訴えて、日本がリーダーシップをとる必要があります。ミャンマーとの関わりからいえば、アメリカなどよりはるかに日本のほうが深い関係を持っているわけですから、日本独自の立場からこの国を支援していく必要があると思います。その意味で貿易投資、観光、技術支援等々、あらゆる分野で日本は積極的にこの国との関係を推進していくべきだと思います。



Otsuma Women's University

(田村教授)

私は今のミャンマーの状態、国際社会に向いているときの状態を考えると、申し上げましたように、最初のネービードー、すなわちマンダレーができた時代と非常に似ていると思っています。これから国際社会に入っていくということについて、ミャンマー自身がミャンマーのためになることとして、いろんなことがなされていかなければならない。マンダレーが出来た後は、植民地支配ということでミャンマーという国が収奪された歴史ですね、こういうことが繰り返されてはならないと思っています。もうひとつ全く別の話題ですが、最初にオリンピックのお話をしましたが、今年の夏、オリンピックに興味があって見てみたら、愕然としたのですが、ミャンマーはこれまでオリンピックでひとつもメダルをとったことがないです。あれだけの国力があって、国の大きさがあって、オリンピックメダルゼロというのはほとんどないわけで、日本がもし援助するとしたら、一番効果があるのは、誰かスポーツのコーチが行ってメダル1個取らせれば絶対に大きな意味があると僕は思います。大澤先生もぜひ、人間生活文化研究所も、学校保健の次は体育を充実させるといいのではないのでしょうか。

(大澤所長)

私は国立スポーツスクールの校長先生の、言ってみれば相談役みたいなことをやっているのですが、あるとき、射撃協会の会長さんに射撃場に連れて行かれました。しかし、選手はいて、練習中なのに音がしていないのですよ、SEAGAMEという東南アジアのオリンピックでメダルを取った選手が何人かいるのにです。その理由は経済制裁で弾が買えないのです。弾がないのに射撃の練習をしているのです。会長さんが私に貴重な銃と弾を渡して、これで撃つてみてくださいというのです。そして、どうか弾が買えるように協力してくださいというのです。私にはそんな力はございませんが、日本の射撃協会の関係者を探し出しまして、「なんとかなりませんか」と言ったところ、「なりません」と言われましたけど、それが現実です。経済制裁が障害となってミャンマーのスポーツは大きく遅れている。これは事実でございます。

それはさておき、私は大学人でございますので、ミャンマーの学生、大学院生たちが日本に来て、充実した留学生活を送って学位を取って現地に帰り、エリートとしてミャンマーの国のために働いてもらいたい、それを強く願っております。そのためにも私たちができるだけ現実的に対応をして、協力していきたいと。どこまでできるかわかりませんが、ここには若い先生方もいらっしゃっていますので、ぜひ手を貸してあげていただきたいと思っております。

これでシンポジウムを閉じさせていただきますが、引き続き隣室でミャンマーに関する情報交換会を行いますので、そちらにも皆様おいで下さい。

大変ご清聴ありがとうございました。感謝申し上げます。